

霞

—2020年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

令和2年9月29日発行(通巻第51号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(51)

古写真「明治時代末期~大正時代初期の土浦駅前通り」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(51) 1
- 博物館からのお知らせ 1
- 【古文書講座、特別公開他】
- 忘れられた藩主の逸話(近世) 2
- 娘たちの教育(近世) 3
- 『香墨新誌』(近代) 4
- 「たにし人形」の造形力(近代) 5
- 市史編さんだより 6
- 土浦藩土屋家の横顔 7
- 霞短信「土浦での学びと流山での仕事」 8
- コラム 8
- 情報ライブラリーコーナーのお知らせ . 8

明治28(1895)年に日本鉄道土浦線(後の海岸線。現常磐線)の土浦-友部間が、翌年土浦-田端間が開通し、土浦駅とともに駅前通り(現大和町)ができました。右手の平屋建ては駅弁を扱った山本弁当屋で、左手には現在土浦市役所があります。電柱が映っていることから、土浦で送電が開始された、明治43年末以降の撮影のようです。駅前通りの裏は湿地帯で、マコモが一面に生えていました。【情報ライブラリー検索キーワード「街並み」】

博物館からのお知らせ

★★古文書講座「江戸時代の古文書に親しむ」(全4回)★★

○対面講座 博物館視聴覚ホールにて、参考文献や古文書の学び方についての講座を行います。

日時：10月4日 午前の部(10時~11時30分)、午後の部(13時30分~15時) 受講料：50円(資料代)

○オンライン講座 博物館のHPにて、古文書の読み方(PDF)を公開します。郵送可(要資料代・切手代)。

日時：10月4日(武家の古文書)・10月11日(町方の古文書)・10月18日(村方の古文書)

★★土浦ミュージアムセミナー2020(全4回)★★

いずれも土曜日。午前10時~11時 ※10/10のみ午後の部(13時30分~14時30分)あり。

10月10日「土浦病院と小川芋銭—石島家に残る作品の整理」

10月17日「土浦地域における弥生から古墳時代の人の動き」

10月24日「名文の玉手箱—弘庵先生『如不及斎文鈔』」

10月31日「江戸時代における土屋家刀剣の管理と引き継ぎ」

講師：学芸員 受講料：各回50円(資料代)

会場：博物館視聴覚ホール 定員：30名(要事前申込。先着順)

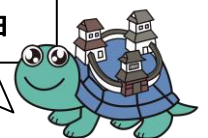
★★特別公開「土屋家の刀剣—国宝・重要文化財の公開—」★★

会期：10月21日(水)~11月15日(日) 土浦藩土屋家に伝わった刀剣の名品を紹介します。

★無料開館のお知らせ★

11月3日(火) 文化の日

11月13日(金) 県民の日



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

忘れられた藩主の逸話

—『土浦城記』の松平信興—

松平信興（1630～91）は、天和2（1682）年から貞享4（1687）年にかけての5年間、土浦藩主を務めました。前後の治世を土屋政直（1641～1722）に挟まれているため、「土浦藩は一時期を除いて土屋家が藩主を務めた」と説明されることが多く、信興は目立つ存在ではありません。しかし、江戸時代の書物には、土浦藩主時代の松平信興の逸話が記されています。それが『土浦城記』です。

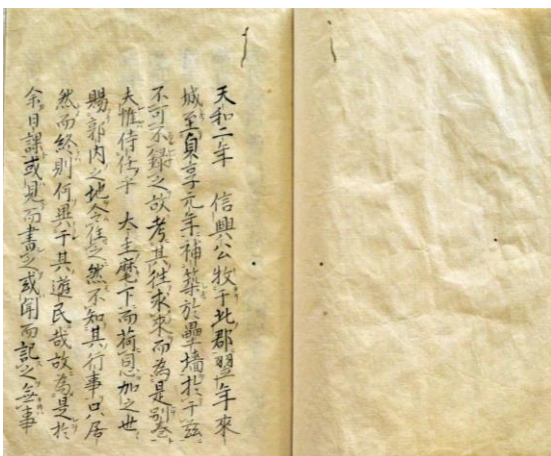
『土浦城記』は、瀧泉寺（土浦市中央）の住職祐鏡が記した土浦城の伝来記で、上下2冊に分かれています。上巻は土浦城の登場から天和2年の松平信興の入城までを、下巻は天和2年から貞享4年の信興の転封までの話をまとめています。前者には貞享元年の年紀と祐鏡の跋文（あとがき）が、後者には祐鏡の序文（はしがき）が記されています。このうち序文の大まかな内容は次のとおりです。

信興公が土浦城に入ってから城の補築が行われた。これを記録するべく別巻を記す。主君から恩義を賜っているのに、城内に住まう中には、それを知らない者もいる。それ故見聞きしたことを記す。

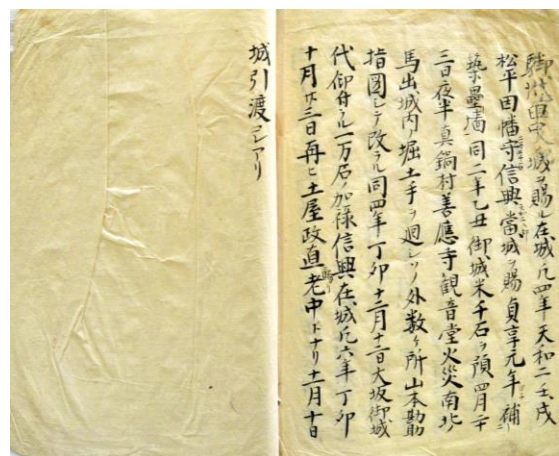
信興の功績が失われることを心配した祐鏡は、それを後世に伝えるために下巻を記しました。この中に記された信興は、酷暑のなか城内の土塁を築造する人々のため、医師に煎じさせた薬を振る舞ったり、継母を養い続ける「孝子」に褒美を与えたりしています。特に孝子の話は近隣の村々に広がり、信興は「慈君」と称された、と祐鏡は記しています。さらに「（信興が）徳のある君子でなければ、誰を徳があると認めればよいのか（他にいない）。このことを記録して、人々の耳底に留めたい」と高く評価しています。

祐鏡が高く評価した松平信興ですが、その逸話は今日あまり知られていません。それはなぜでしょうか。『土浦城記』は複数の写しが作成されましたが、松平信興の逸話や祐鏡の意見も写されたものは、その一部に過ぎません。多くは、『土浦城記』の名のとおりに、土浦城の歩みに関する部分のみを写したもので、特に天和2年以降の記述は極端に減少します。写しが作られる中で、城との関係が薄い信興の逸話は少なくなり、その結果忘れられていったのではないかと推測しています。

（西口正隆）



『土浦城記』下巻序文（当館所蔵）



『土浦城略記』（個人所蔵）



秋季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。（近世コーナーに展示）

- 省略された『土浦城記』の写本『土浦城略記』（個人所蔵）
- 土屋政直道歌（当館所蔵）



娘たちの教育

—おがた てならいほん —尾形家の手習本—

学校の教科書を、大人になっても保存している方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。

博物館の寄託資料、尾形家文書には、江戸時代の教科書が100点ほど含まれています。尾形家とは、古着や呉服などを扱った尾形徳兵衛家（屋号大国屋）のことで、教科書は150年の時を越え、敷地内の蔵で大切に保管されていました。

江戸時代の学びの基本は、先生が書いた手本を読んだり書いたりすることで、この手本を手習本といいます。驚くべきことに、尾形家文書の手習本はほとんどが娘たちのものでした。中身は往来物（模範文を教科書用にまとめたもの）や女訓書、字尽（人名や地名を並べたもの）から漢詩に至るまで、内容はさまざまです。

商家では、娘に商才のある婿養子を選んで家を継がせることがありました。血筋に頼らず実力主義の人選を行うことが、家の永続的な発展につながると考えられていたからです。尾形家では2代徳兵衛の娘ひさから4代徳兵衛の娘とみまで婿養子を迎え、3代にわたり婿が徳兵衛を襲名しています。

商家の娘は本質的な跡取りと見なされ、奥向きのことをつかさどる「女主人」の役割を果たすことが望まれました。その基盤を作るため、幼児期のしつけと娘時代の教育が重要とされました。手習本を大切に保管していたことから、娘たちの教育を重んじる、尾形家の家風が伝わってきます。

手習本のひとつをご紹介します。尾形とみは嘉永4（1851）年、4代徳兵衛の長女として生まれました。写真は、とみが7歳になり読み書きを習い始めたころの手習本です。「大こくやとみ 御てならい御はしめなされめてたく かしこ」と、とみの名前と手習い初めを祝う言葉が平仮名を多用して書かれています。

その後、とみは「源氏物語」や和歌の手習本で平仮名を習得し、12、13歳くらいになると、漢詩や「本朝列女伝」などの女訓書、字尽で漢字を学びました。

とみは真壁郡吉田村（現筑西市）尾見半造の次男林助と結婚し、林助が5代徳兵衛を襲名しました。とみは夫を補佐しながら、尾形本家の女性として親類や分家などのまとめ役を担いました。尾形家の奉公人がとみの健康を気遣い、13種の衣服を送ることを伝える手紙も残っています。とみは「御老母」という敬称で呼ばれ、隠居してからも家内で高い地位を保ちました。（木塚久仁子）

【参考】 永野絵里「土浦商家大国屋徳兵衛家の女性—手習本にみるその躰と教育」（土浦市立博物館紀要第9号 1999年）



とみの最初の手習本（個人所蔵）



秋季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。（近世コーナーに展示）

- 初代尾形徳兵衛・婦人墓誌（拓本）
- とみに衣類を送る書状（個人所蔵）
- 霞26号 尾形文二郎の手習本（HPから閲覧できます）



こうぼくしんし
『香墨新誌』

—明治時代に土浦で生まれた俳句雑誌—

「霞」38号で、医薬や書籍販売を家業とした柳旦堂の主人柳沢鶴吉（1864～1924）を取り上げました。郷土の歴史や風景の記録に携わるといふ、編集者としての鶴吉を紹介しましたが、今回は、鶴吉が発行人として協力した雑誌『香墨新誌』に注目したいと思います。

『香墨新誌』は、山口常太郎（号不言斎李蹊。1857～1902）のおこした土浦俳学院が、明治29（1896）年1月に発行した俳句雑誌です。年会費40銭で、毎月5日に発行されました。明治20年代の終わりから30年代の初め頃は、正岡子規の俳句革新運動が俳界の耳目を集め、茨城の地にも新俳句の波が押し寄せてきていました。常太郎は旧派でしたが、こうした時代の動きには敏感だったといえます。鶴吉は、父柳旦の遺志を継ぎ「不爭軒二世柳旦」の号で土浦俳壇に足跡を残した人物でもありました。俳人かつ、編集者として、雑誌の発行に関わったと考えられます。

『香墨新誌』には全国各地から投稿がありました。この中の一人に、河童を主題として描いた作品で知られる小川芋銭（1868～1938）がいます。芋銭は江戸の牛久藩邸で生まれましたが、廃藩置県により家族は牛久へ帰農、芋銭は東京へ丁稚奉公に出ます。その頃から絵画を学び始め、明治23年には、朝野新聞で挿絵を描くようになりました。父の隠居に伴い明治26年に帰郷し、農業のかたわら画業を続けています。芋銭は、牛久から「牛里」の名で『香墨新誌』に毎月のように投稿していました。芋銭の句を一つご紹介します。

笑う子の 歯に似て 梅の二三輪 牛久 牛里

（『香墨新誌』第14号〈明治30年4月発行〉より）

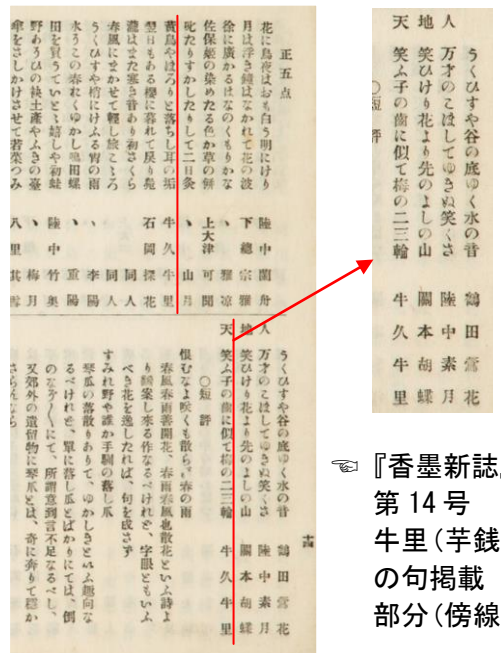
早春に、ほかの花にさきがけ、ちらほらと咲きはじめた梅の花を、歯が生え始めた子供の笑顔になぞらえ、これから花ひらこうとするさまが、明るく詠まれているようです。この句は「秀逸」の区分に掲載され、「天」の評価をうけました。

この句を投稿した前年、芋銭には長女「はな」が生まれています。「笑う子」はおそらく「はな」でしょう。若き日の芋銭の父親としてのまなざしや俳句に親しむ日々が偲ばれます。

『香墨新誌』は明治31年に廃刊（23号までの刊行を確認）となったようですが、学校教育の広まりや印刷技術の普及、郵便制度の機能などにより、文芸に親しむ人々の裾野が広がるなかで、その受け皿となる出版物の一つであったと言えるでしょう。（野田礼子）



『香墨新誌』第9～10号（当館所蔵）



『香墨新誌』第14号牛里（芋銭）の句掲載部分（傍線）



秋季展示では館内での解説会はいりません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。（近代コーナーに展示）

- 看板「土浦柳旦堂新聞店」（当館所蔵）
- 『筑波山と霞ヶ浦』（当館所蔵）
- 『現代之土浦』（当館所蔵）



「たにし人形」の造形力

—世相を伝える人形たち—

「かすみ人形」は昭和9（1934）年に考案されました。当初の「かすみ人形」には、瓢箪の「ひさご人形」と、田螺を材料にした「たにし人形」の2種類がありましたが、材料の入手のしやすさと、水郷土産としてのふさわしさから、「たにし人形」の方が主流になっていきました。人形制作は「土浦郷土工芸研究会」により担われました。「郷土工芸」の名称に示されたように、「かすみ人形」は土産品としてだけでなく、工芸品として「茨城工芸展」などに出品され、東京や地方都市などで販売されたことが分かっています。

「たにし人形」の魅力は、貝殻の屈曲を活かした造形美にありました。「弁慶と牛若丸」「水戸黄門」「二宮金次郎」「船頭」「狸」「河童」など、博物館が所蔵する「たにし人形」には様々なバリエーションがあります（写真左）。いずれも田螺を素材にしたとは思えない精巧な作品です。昭和11年にはクリスマスの贈り物として人気を博したとの新聞報道もあり、「サンタクロース」はこの頃の考案かもしれません。また、昭和12年3月14日の「いはらき」新聞では、「若い田螺の線を生かして美しい色彩を施した郷土芸術の先端をゆく」ものと評され、「オリムピック土産としても碧い眼のお客さん達に悦ばれること請合」だと報じられています。前年に開催が決まり、のちに日中戦争の影響で幻となる1940年東京オリンピックの土産品として期待されていたようです。

写真右は、「大日本国防婦人会」の襷をかけて日の丸の旗を手にした人形です。昭和11年の「いはらき」新聞では、愛国国防婦人の人形や銃を手にした兵士など時局色豊かな人形が好評だと伝えていしますので、同時期の制作かと推測されます。また、昭和17年10月1日の「土浦名物『霞人形』南方へお嫁入」の記事では、日本趣味豊かな人形を南方に送るため、「汐汲み」「藤娘」「勧進帳」を大量生産していることが伝えられています。翌年の新聞でも戦塵おさまった南方へ「純日本趣味」を普及させるために移送することが報じられました。数年前までクリスマス商品やオリンピック土産として認識されていたわけですから、戦争に突き進むなかで「たにし人形」に対するまなざしが大きく変化していったといえそうです。

「たにし人形」は、貝殻がもつクセを巧みに利用することで多様な造形を生み出しました。一方、その汎用性の高さゆえに、時代を鮮明に映しとった作品が創られることもありました。小さな田螺の人形は、歴史を伝える証言者でもあるのです。

（萩谷良太）



☞ 様々なたにし人形
（当館所蔵）

☞ 愛国国防婦人の
たにし人形
（当館所蔵）



秋季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 霞3号 かすみ人形と水郷の土浦（HPから閲覧できます）
- 土浦市立博物館紀要30号 郷土工芸品「かすみ人形」
—考案者・関勝久氏の事績をもとに—（受付にて販売中）



市史編さんだより

『ブックレット1 醤油のまち 土浦』の刊行

これまで市史編さん事業では、各家に伝わった古文書の内容を調べて一覧形式にする目録の刊行や、『家事志 色川三中日記』のような資料集の刊行を続けてきました。地道な調査を経て刊行に至る目録や資料集は、土浦市域が辿ってきた歩みを知る大切なもので、展覧会をはじめとした博物館活動の礎にもなっています。こうした市史編さん事業の成果をわかりやすくお届けする新たな手段として、このたび「ブックレット」というシリーズの刊行を始めました。歴史豊かな土浦に関する一つのテーマを掘り下げ、手に取りやすいコンパクトなサイズでお届けしようとするものです。

この新たなシリーズの第1冊目に選んだテーマが、醤油醸造です。江戸時代から続く柴沼醤油が現在もその伝統を守り伝えていることもあり、土浦が醤油の産地であったことはだんだんと知られるようになってきました。とはいえ、いつ頃どのようにして始まったのか、明治や大正の頃はどうかだったのか、その全体像となるとあまり明確ではありませんでした。

しかし、ここ数年の間に土浦の醤油醸造については様々なことがわかってきました。きっかけとなったのが、平成28(2016)年に開催した特別展「まちなしるし」です。醤油瓶にそれぞれ印(現在の商標に相当)をつけて売ることから、展覧会を構成する主要なテーマのひとつに醤油を取り上げました。以前は、江戸時代のこととして醤油を扱うことが多かったのですが、この展覧会では明治時代以降の醤油に関わる資料も積極的に扱ったことで、江戸時代から明治時代以降を連続する一つの〈歴史〉と捉える視点を手にできたように思います。認識を新たにすると、これまで見えてこなかった館蔵の古文書の存在にも目が行くようになります。市史編さん係のスタッフが、色川三郎兵衛家の近代の醤油醸造に関する文書を見出してくれました。

とりわけ近代までの通史を描くうえで大きな「武器」となったのが、柴沼家に伝わった「醤油屋仲間証文帳」(市指定文化財)です。江戸時代中期から昭和23(1948)年まで、実に184年にもわたって土浦の醤油醸造家によって書き継がれてきた貴重な資料です。これについては、平成17年に市史編さん事業としてそのすべてを翻刻し、刊行しています。江戸時代中期から昭和までの土浦の醤油醸造の歴史を叙述する



『ブックレット1 醤油のまち 土浦』

(A5判 72頁) 1冊 400円で販売中

ことができたのも、この貴重な資料が今日まで大切に保存されてきたこと、そしてそれを誰もが読めるように活字に起こした資料集が作られていたおかげであったことは強調しておきたいと思います。展覧会活動と目録や資料集の成果が有機的に結びつくことで豊かな歴史叙述が可能となることを、将来にわたるブックレットの刊行を通して示していければと思います。そして皆様には、どうかブックレットを手にとりいただき、地域の歴史・文化をともに学び、この地域がもつ奥深い魅力に触れていただければと願っております。

(堀部 猛)

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には『寛政重修諸家譜』を用い、「土浦土屋家系譜」（『茨城県史料 近世政治編Ⅲ』所収）で補足しました。ゴチック部分が引用です。



その六、土屋泰直【つちや やすなお】

健次郎 能登守 従五位下 篤直が二男

明和五年生る 寛政二年五月十二日卒す 年二十三 善応義信純徳院と号す

室は太田備中守すけよし資愛が女

■ **10歳で藩主就任** 安永六年七月兄寿直ひさなおが嗣よつぎとなり、九月十三日其遺領を継。時に十歳。

泰直は4代藩主篤直あつなおの次男として、明和5（1768）年3月13日に生まれました。兄寿直が安永5（1776）年7月16日に5代藩主となりますが、翌年7月19日に亡くなってしまいました。そのため泰直は、2ヶ月後の9月13日に、兄の遺領9万5千石を継いで6代藩主となりました。しかし、まだ10歳と幼年であったため、將軍への謁見もできず、受領名も賜っていませんでした。

■ **関東河川の改修に尽力** 天明元年四月朔日関東川々の普請をたすけつとめしにより、時服十領を賜ひ、家臣等にも時服白銀等をたまふ。

天明元（1781）年4月、泰直は幕府の手伝普請に尽力したことから、幕府から時服（季節の着物）などの褒美を拝領しました。手伝普請とは大規模な土木工事を行う際、幕府が各地の大名に労働力や資材、代金を負担させる役負担のことです。安永4年からは手伝普請のあり方が是正され、幕府勘定所が一手に引き受け、担当となった大名は普請費用を負担し、形式的に立会いました。

江戸神田雉子町き じちようの町名主齋藤幸成ゆきなり（月岑げっしん）が記した「武江年表」によれば、安永9年6月は大雨が続き、同月26日には利根川や荒川、戸田川などで洪水が発生し、人家や橋が流されるなど大きな被害が出ていました。関東河川の手伝普請は、この復旧のために行われたと考えられます。

■ **妻は太田備中守の娘** 室は太田備中守資愛が女。

10代藩主土屋采女うねめのしやう正ともなお（寅直ゆきなり）が記した「系図」（国文学研究資料館所蔵）によれば、泰直は当初西尾藩2代藩主松平乗完の娘と婚姻を結ぶ予定でした。しかし、話が整わないうちに乗完の娘が亡くなったため、掛川藩2代藩主太田資愛の娘と婚姻を結びました。「土浦土屋家系図」によれば、天明4年12月15日に婚姻御礼として、幕府へ紗綾さや（絹織物の一種）を献上しているため、この年に婚姻が整ったと考えられます。この縁から、義父太田資愛は、刀「備前勝光びぜんかつみつ」や脇指「越前守わきざし 源信えちぜんのかみみなもとのぶ吉よし」（土屋家刀剣 No. 65）を泰直へ贈りました。

（西口正隆）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、昨年度まで当館の市史編さん係に勤務していた、伊藤智比古さんに寄稿していただきました。

土浦での学びと流山での仕事

今年の3月まで、4年半にわたって土浦市立博物館の市史編さん係非常勤職員として勤務していました。在職中には、おもに戦争体験の聞き取り調査に携わっていました。

調査では、戦中・戦後の暮らしの記憶を幅広く集めました。そうした調査の集大成が『「市民の記憶」収集事業報告書 土浦の人と暮らしの戦中・戦後』です。多くの方のご協力を得て刊行に至った同書ですが、戦争の時代を経験した方々の記憶を十分に「聞き取る」ことができていたか、そしてそれを紙面で伝えることができているかという点については今なお気がかりに思っています。

聞き取りでは、満洲から命からがら引揚げてきた方の「難民のニュースを見て心を痛める」という言葉、疎開で一家離散の経験をした方の「戦争は絶対にいけない」という思い、元予科練生の方の「同級生よりも階級が上になると思って入ったのに終戦になってしまい残念に思った」という話などが強く印象に残っています。同じアジア・太平洋戦争の時代を生きたとはいえ、体験や思いは一樣ではなく、それらはいずれも時代・社会のなかでの感情を伴った生活であり、その後の生き方や考え方にも大きく影響していることを肌で感じました。

翻って、私は今年の4月に、千葉県にある流山市立博物館の学芸員となりました。市としての流山の歴史は新しく、概ね現在の市域が形成されたのは昭和26年、市制施行は昭和41年のことです。近年、子育て世代を中心に急激に人口が増加しており、新しい小・中学校も建設中です。この新しいまちに新しい住民が増えるなかで、地域の歴史や博物館の活動にいかに関心を持ってもらうか、持ち続けてもらうかがこれからの課題になってくると考えています。近現代の出来事に対する関心の持たれ方は土浦とは異なるように感じていますが、身近なところに歴史の痕跡があることや、歴史資料を手掛かりに、時代・社会によって異なる人々の生活や思いを知る場をつくることができたら、と思っています。

(流山市立博物館学芸員 伊藤智比古)

コラム(51) 色川三中と書くこと

町人学者色川三中の言説を振り返る機会がありました。三中は度々「記録が確かならば迷わないし争わない」と、書いておくことの大切さを書き留めています。「記録は未来のための用意」という考え方にはまったく同感で、私も日々書いておくようにしているつもりですが、迷いや思い違いは一向にありません。

三中と自分を比べるのはおこがましいのですが、何が違うのか考えてみました。三中は膨大な量の筆記を残していますが、書いたものには小見出しをつけたり、手直しを加えたり、繰り返し読み返していることが歴然としています。それに比べて私は、書きはするものの、インデックスをつけたり、整理をしたりはしていません。

三中は「才能がなく、心に迷いがある人でも、静かによく考えれば、どれほど多くのことを考え出すことができるだろう」とも言っています。大切なのは書くことでなく、それに基づいて考えを整理することなのだと思います。(木塚久仁子)

情報ライブラリーコーナーのお知らせ

【2020・9・29 現在の登録数】

古写真 600点(+0)
絵葉書 512点(+0)

※展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しておりますが、新型コロナウイルスの感染予防のため、現在、一部ご利用を制限しております。ご了承ください。

霞(かすみ) 2020年度
秋季展示室だより(通巻第51号)
編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>
1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2020年度秋季展示は、2020年9月29日(火)~12月27日(日)となります。「霞」2020年度冬季展示室だより(通巻第52号)は2021年1月5日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます(カラー版)。